

【分野】 野菜

夏秋トマトの裂果・草勢低下対策

【要約】

夏秋トマト栽培で、台木に「グリーンフォース」を用いると秋期の収量がやや増加します。また裂果に強い新品種の導入により、裂果の発生率を大きく低下させることができます。

【背景】

夏秋トマトでは、夏期の高温や強日射の影響で裂果（図1）の増加や草勢低下による減収が問題となっており、対策が求められています。そこで、夏秋期の裂果及び草勢低下を軽減する方法について検討しました。



図1 トマトの裂果

【結果】

1 秋期の増収が見込める穂木・台木種の組合せ

穂木「桃太郎ワンダー」と台木「グリーンフォース」の組合せは、自根や台木に「キングバリア」を用いた場合と比較して、増収することを明らかにしました（図2）。

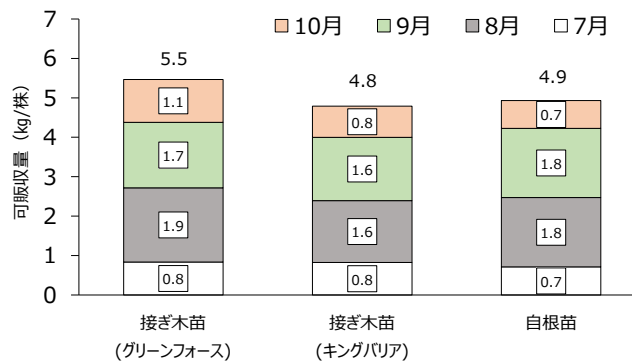


図2 「桃太郎ワンダー」の接ぎ木苗及び自根苗の月別の可販収量

2 秋期の増収が見込める栽培管理の方法

7月中旬に開花した1花房を摘除すると、8月の収量は減少しますが、9月以降の草勢を強く保つことができ、秋期（9～10月）の収量が増加し、粗収入の増加にも期待できます（表1）。

表1 摘花房処理が収量に及ぼす影響

処理区	裂果発生割合(%)			
	0 <sup>2</sup>	1	2	3
桃太郎みなみ	81	17	1	1
麗月	96	3	0	0
桃太郎ワンダー	48	33	10	9

<sup>2</sup>裂果発生程度（0～3の4段階評価、0；発生なし、1；果肉に達していない、2；果汁が出ない、病気・腐敗がないもの、3；規格外品）

3 裂果に強く、収量が安定する穂木品種の選定

新品種「桃太郎みなみ」及び「麗月」は「桃太郎ワンダー」と比較して程度の強い裂果が少ないことを確認しました（表2）。

表2 各品種の裂果発生程度の比較

処理区	裂果発生割合(%)			
	0 <sup>2</sup>	1	2	3
桃太郎みなみ	81	17	1	1
麗月	96	3	0	0
桃太郎ワンダー	48	33	10	9

<sup>2</sup>裂果発生程度（0～3の4段階評価、0；発生なし、1；果肉に達していない、2；果汁が出ない、病気・腐敗がないもの、3；規格外品）

担当：農業研究所 高冷地研究室(0867-66-2043)

研究課題名：夏秋雨除けトマト栽培における秋期増収技術の開発（H29～R3）  
夏秋雨除けトマト栽培における安定生産技術の開発（R4～7）